

## 〈博物館文化講座100回記念講演〉 博物館の歴史展示について

坪井清足\*

一介の考古学をやっている人間が、このような表題の話を引き受けるようになったかのいきさつを、若干ご説明した方がわかりやすいのじゃないかと思います。私、実はただ今のご紹介にありましたように、ほぼ30年間程、奈良県の今から1200年程前の都でありました平城宮の発掘ということを中心やってまいりまして、昭和40年（1965年）に文化庁記念物課へ参りました、全国の都道府県の方々といろいろな文化財の特に埋蔵文化財の保存という問題にとりくんでまいりました。

戦前からというか早くからそれぞれの史跡を保存するということが大正8年（1919年）にできました。史跡名勝天然記念物保存法という法律によって、各地の由緒ある所を史跡として残すというようなことをやってまいりまして、私の30年間程発掘調査をしております平城宮跡というもの、その史跡の一部です。そういうものを保存するということをやってまいりますと現在の沖縄でも城とか、貝塚とかいくつも史跡に指定されたり、あるいはまだ史跡にされておらないものも、やはりこれからも保存していくなければならないという問題があるわけですが、そういうものは現在生きた姿で残っているものではなくて、そこは、かつて人間の営みが行われた場所でありますけれどもそれを作った時代の生活が、今では変化してしまって、廃墟になっていることが多いわけあります。

たとえば、県立博物館の南に隣接する首里城に致しましても明治以降廢城になり、沖縄戦では地下に軍指令部がおかれたため、米軍の猛攻をうけ灰尽に帰し、その後琉球大学が設置されました。最近又琉球大学が移転しましたので、今後どのように保存していくかという事が県民の皆様にも非常に大きな関心をよんでいると思います。首里城のような城をどういう形で、つまり500年余の長期にわたってつかわれ、政治・経済の中心的役割を果した城であったから、残さなければいけないのだということを示すためには、やはりその遺跡そのものをいろいろとみせていかなければならない。一般市民の方々にこういうものだとわかるようにして保存しなければならない、という問題の外に、やはりそれを補足的に説明する遺跡における博物館的なもの、あるいは資料館と現在よんでいるものもあるわけですけれど、そういうもので現地の地形とその他残っている石垣とか、いろいろな貝塚の貝層だけでは素人になかなかわかりにくいので、そこから出た成果をもう少しありやすく説明しなければ、一般の人に何のためにこういうものを保存するのかという意義をわかっていただけにくいのです。ということで、掘り出したものをどうやって一般の方々にご理解いただけるかということから、博物館的な展示というものにたずさわるようになってまいりました。

ちょうどそのころ、日本の博物館の中に欠けているものとしまして、この歴史的な展示をする博物館が日本になかったので、歴史博物館というものを作ろうという話が出てまいりました。今日の

(\* つぱい きよたり 奈良国立文化財研究所所長)

手元にありますレジュメの中にも若干触れていますが、そういうものの準備のために私は昭和42年（1967年）にヨーロッパを1カ月程視察旅行させてもらいました。

そこでソ連と北欧諸国とギリシャまで1カ月程でヨーロッパを南北に縦断致しまして、いろいろな博物館を見学致しまして、そこでの歴史的な展示をいろいろとみてまわったわけです。私が昭和42年（1967年）にそういうものを見て参りまして、その報告のレポートでいろいろ資料を提出したようなもの、いくらか参考にしていただければと思っております。そういう調査にはじまった歴史民俗博物館が来年の3月の中頃に、千葉県の佐倉市でオープンすることになっておりますが、この事前調査にかかわりをもつたことで、歴史的な展示というものに私が関係を持つようになったわけです。

博物館には今までに歴史展示があるのじゃないかと、おっしゃる方もおります。しかしどうも日本での博物館というものの方をみておりますと、明治初年に、博物館が政府によって作られ始められました。日本の考古学の一番最初に科学的な発掘をやったお雇い外人の教師の一人でありましたアメリカ人のエドワード・モースが、大森貝塚で石器時代の遺跡を発掘したわけですが、そのモースが博物館の開祖の一人であります。モース自身は生物学者でありますので、自然科学の博物館というものを手懸けたというか、その基礎をつくったわけであります。その後明治政府は博物館というものをいろいろな形で運営いたしましたが、その方針が現在上野にある科学博物館という形で、文部省の所管している博物館ができあがっております。

最初、自然史も人文系のものも全部一緒にやっていたわけですが、その中から帝室博物館というので、歴史と美術というものを中心にした博物館が独立しました。これはずっと宮内省が所家し、やっておりましたので、帝室博物館という名が残っていたわけで戦前はずっとあったわけです。この博物館が、実は関東大震災で建物が大きく崩壊しました。それを再建するという形で、どういう博物館を作るかという時に、ざっくばらんに言いますと、研究者の派闘的な争いになったような面もあるわけですし、美術史を専攻しておられる方と歴史を専攻しておられる部門とがその当時の博物館にあったわけですが、いろいろと大論争がありました。その結果、上野に再興する博物館は美術史、美術の歴史、わが国の国宝といいますか、国の宝として指定しております美術品を中心とした博物館をつくることになったのです。一方歴史はそれとは別の歴史を中心とした独立機関をつくることが昭和のはじめに決まりました。それですから現在上野にあります東京国立博物館は、わが国の美術の歴史をふりかえさせるための博物館だということになりました、美術作品を鑑賞するという流れが非常に強くなってきたわけです。

ところが、博物館というのは、外国の博物館の歴史をみましても、やはりそういう鑑賞的な美術品を国王だとか貴族が集めたものを、集めるというのは一生懸命珍しいものを集めるというだけではなくて、せっかく集めたコレクションを人々にみせたがるといいますが、みせびらかすということが、気持の中にあるわけでして、そういうものを各国の貴族や王族といいますか、国が美術を展示する博物館というものに変わっていくわけです。現在諸外国では、このようなものを主として美術館とよんでいるわけです。

日本の場合はこのような美術館的なものを博物館という名前でよんでいまして、昭和の初年まで組織として東京国立博物館の中にありました歴史課をつぶしてしまいました。

ところが昭和30年（1955年）代になりました、日本に歴史博物館がないのはおかしいということになりました。初めは民俗学の人達が独自の博物館をつくりたいという要望が出てきたわけですこのような経緯で博物館の中に、一つ歴史的なものを理解し、その土地その土地の歴史を理解していただくための博物館をつくろうという気運がおこってきたわけです。そうはいいながら博物館には、主として美術の歴史を勉強した学芸の方が勤務しておられますので、どうしてもまだ現在の全国の博物館の中での歴史展示というのは、なにかの目玉商品を中心にして鑑賞してもらうような態度が、なかなかとりきれないというところがあるわけです。

ところが、これはなにも日本だけのことではありませんで、先程言いましたようなヨーロッパを十数カ国みてまわりまして、痛く感じました。ヨーロッパにおいてもフランスとかイタリーとか、とくに南欧の地域の博物館というのは、歴史的にもギリシャ・ローマという美術作品がいっぱいある時代を、その土地が経ていますから、そういう時代の作品もいっぱいあります。さらにルネッサンスというものがイタリーを中心に起りまして、フランスからさらに北欧へ波及していくわけですけれど、ルネッサンスの作品は非常に大量にあって現在でもヨーロッパの芸術の歴史を勉強するところいうものが基本になって並べられています。そうすると博物館にはそういうものが大量に展示されておって、美術の歴史を知るには便利な展示がされているということになるわけです。

ところが一方で、北欧諸国には古代から中世あるいは近世の初めの、歴史的な流れからいいますと、北欧にルネッサンスの時代はありませんないわけです。なくていきなり近代へとびこんだ国だと言ってよいわけです。そうすると例えば北欧の中でもスウェーデンのストックホルムにあります国立博物館をみて、これはルネッサンスから以後の近代的な美術を並べた部屋もありますけれど、土地の作家というものが（これは皆さんご承知の作家もおられますけれど）イタリーやフランスあるいはオランダあたりと比べて、ものの数に入らないくらいの作家しかいないので、貧弱な展示物しかない。あるいは南欧に比べて北欧は乏しいと言えると思います。そういう国で、美術以外の歴史を知るための博物館というものは非常に発展しています。これからスライドで、若干みていただくなっていますけれど、展示の中に優れた展示があります。それはなにかというと、美術品でもそれぞれの作品を鑑賞させるという形があるわけですが、歴史の展示というとやはり古文書であるとか、その他の歴史的に使われた道具類、あるいは古代・中世・近世の庶民の使っていた道具類などが、展示の対象になるわけです。歴史の展示というのは、その展示物の中にはそのものだけでみたら、美術作品とちがい、鑑賞に耐えられるものでもなんでもない物もあるわけです。だからそのものがこういう意味があって使われたのですよということを、わかるように展示しなければ、たんにそれひとつをポンとおいてそこへ学名を書いていただけでは何のことかわからないのです。最近できた日本の博物館を拝見しながらも、例えば石器時代の展示物があるところへ貝塚から貝ができるというので、貝殻が若干置いてあります、それに難しいラテン語の学名が書いてあって、ただけの展示がまだまだ横行しているようあります。

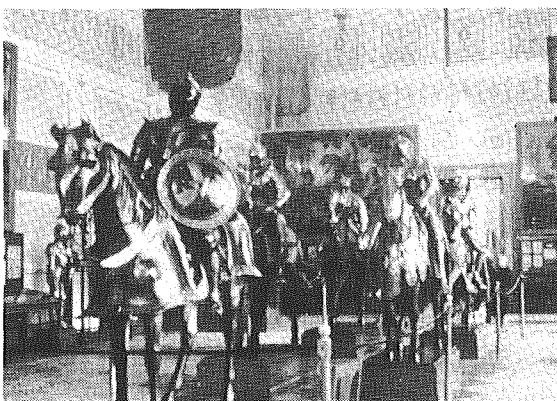
そういうのでは一般にこられる観客の知識ではそれがどういう意味をもっているのか、なかなかわかりにくいわけであります。だからそういうものがむかしの生活の中でどういう意味を持っているのかを、わかるような展示に、どうやったらできるのか、ということあります。

ところが博物館の展示といいますと、日本の場合にはかならず何百字かの解説を一生懸命そこに

書いて並べるわけです。その解説文を読めばその場限りではわかったように——それもわかりにくい学術用語を使ってあってわかりにくいことが多いようです。もしやさしく書いてあっていったんその場ではそれを理解したとしても、例えばこの博物館でも展示する場所が数部門あるわけですから、題せんやら説明板を読んでいけば少なくとも、この博物館に入ってから出るまでに、50以上のあるいは100以上のそういうテーマを頭に入れなければならぬのです。そんなものを最初から最後まで読んでいって出てみたら、最初に読んだはずのも、よっぽど印象的なものでない限りはすっと抜けてしまうのがあたりまえじゃないかと思います。まして小、中学生の諸君は一生懸命ノートしているかもしれません、本当にそういう文字でいくら書いてもなかなかわかりにくい。これはこういう風に使われたものだというものを、展示してあるものに語らせなければわかりにくいわけです。

ところが今までの美術的な鑑賞を主とした博物館をやってこられた方は、必ずしもそういうことに慣れていない。私ども先輩から考古的な展示物というものに対して汚れものということをいつもいわれました。美術史の研究者にしてみればこわれた茶碗やなべのかけらであり、それはがらくたであるとしか思われていない。事実小さな土器のかけらなどはそうとしか受けとれないようなものなんです。だからそういうものを、どういう風に展示していくかということにはいろいろな工夫がいると思うわけです。

これから少しスライドを無秩序ではあるわけですが、みていただきます。



① 騎馬武者行列（エルミタージュ博物館 ソ連）

① 写真はレーニングラードにあるエルミタージュ博物館というソ連で一番大きい、世界中でも屈指の博物館である。ここは展示室が総計五百数十室ある。普通の国の博物館で走るなんていうことは以ての外である。しかしエルミタージュ博物館においては、半日しか余裕がない場合、部屋から部屋へ走って見なければ全てを見られない程大きなところである。

これは中世の騎馬武者をズラッと並べおり、いかにも一般的な人々に歴史の展示はこういう

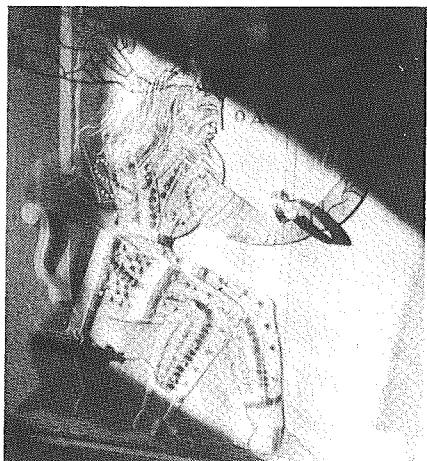
ものだと思わせるような展示物の代表的な例として、こういう甲冑類を並べたもの。諸外国でも日本でもこういうものをいくつか並べていると思うが、いかにも馬もその上に乗っている人の形もわかるような、歴史展示と思えるような常識的な展示の中では大規模なものとしてみていただいた。

このうしろ側の室を華やかに飾ってあるのは、ロマノフ王家の宮殿を利用しているからである。シャンデリアなどがそのままに保存されている。私自身はこの展示を感心しているわけではないが歴史展示として一番わかりやすいものというのでトップにあげてみた。

② 写真は背面に地図が書いてあって、これは黒海の北のステップ地帯に、今から3000年から2500年位前にそこにスキタイ人とよばれる遊牧民がおり、そこから黒海の南に植民地を持っていたギリシャ人の植民地からスキタイ人が手に入れたギリシャ6世紀から5世紀くらいの古典時代よ

り古いアルカイック（古拙）時代の作品がいろいろと出土している。そういうスキタイ人の墓から出てくるものを、並べている。右上の舌を出している、ゴルゴンの顔を浮彫りにした鎧はギリシャの鎧の作品としてはもっとも優秀なもので、ヨーロッパでもそれだけの古典以前の優秀な作品はないかなかない。分布図と並べて、こういうものがこの地方から出ますということを示している。

②  
（エルミタージュ博物館）  
スキタイ人の服飾



③ 写真は同じく金ボタンを配列し、腕のところに金製の腕輪がはめてある。透明のプラスチックでこの時代のスキタイ人の形をあらわしている。この人の形は拳大よりもうちよっと大きい金の壺の脇部に浮彫でスキタイ人の風俗があらわされたものからとったもので、その壺には、ギリシャ人がスキタイ人に頼まれて、スキタイ人のその当時の風俗を非常に写実的に描かれている。その浮彫にこういう髭をはやした男が腰掛けているものがある。その頃そういう人達がつけていた飾り金

具や洋服につけていた飾りを、実際に墓から出土したもので表現している。そうすると、これがこのピンのこういうのがあるとか、あるいはこういう所に縫いつけたボタンだというのは一つ一つ棚に乗せてみせるよりはもっと具体的にこれはどういうふうに使ったのかがわかると思う。

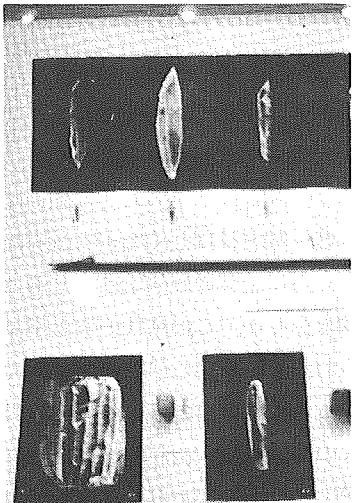
④ 写真は同じスキタイであるが、頭の冠をつけた飾りと首飾り、バンドの飾り、それからバンドからぶらさげているいろいろな物、腕輪、剣の柄などのようなものがこういう形でつかわれたということを示したものである。

日本では、どこから出たもの、何世紀のものだというような解説があるけれど、この博物館ではほとんど文字が書かれていないで、部屋にこういう時代というようなことがあればわかる。この左端の金製のものは、これは矢を入れて腰にぶらさげるゴリトス、日本語で言えば「胡籠」である。その他いろいろな馬具が出ている。

⑤ 写真は馬の「はみ」とか、馬に使ういろいろな飾りの金具や、道具類があって、馬の絵がかけてあって、それに、こういう金具が使われるのだ、という絵が示してある。

私は日本のことしか知らないで、初めて外国に行ったので、この辺も非常に斬新な展示をしてあると思い、最初の頃は驚いたが、これにはもう少しこれの元祖になるのがスウェーデンにあることがわかった。

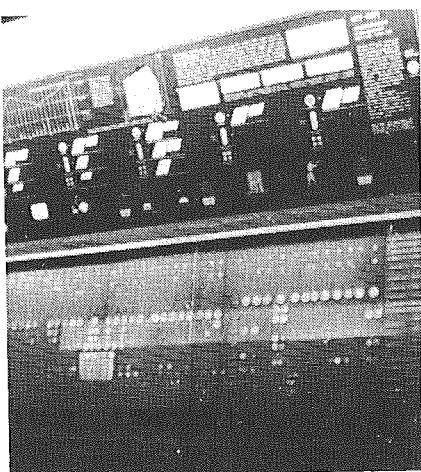
⑥ 写真は同じエルミタージュ博物館の展示であるが、もう少し新しい歴史時代になってのもの。この辺は金具ですが、ここにこういう丸太の一部分が描かれてあって、物がくくりつけてある。例えば15世紀位の、現在のロシアの国ができはじめた頃の、ノブゴロドのような所では、都市の遺跡が発掘されている。そういうものが、こういう所で若干示されているが、この点になると、先程の展示よりは絵が多くてわかりやすいけれど、あまり上等な展示ではなかったように思う。エルミタージュの中にも先程の騎馬行列のような古風な展示から、近代的に進んで改良されている部分までが、全体としてはもう一つすっきりしない。



③ 細部を見せる工夫  
(スエーデン国立歴史博物館)

それから、ここに写真で部分を拡大している。石器の実物は小さすぎてわかりにくいくらい、それを拡大してみせている。それは細石器の石核だから、ここに縦に縞模様になっている。この上をポンとたたくと剥片がとれるわけである。その剥片をここに置いてあるわけである。その剥片を木の柄の先にこういう様に埋めこんで槍として使うのだと示してあって、小さなものでもどういうようく使われたかがわかるように説明されている展示の一つだと思う。

④ 貨幣の展示  
(スエーデン国立歴史博物館)



展示している。他でもグラフを入れて説明をしたりするようなことが若干あるけれど、この下のお金がその時代にはこれ一つで今の人もわかる殻類とかそういうものと比べてどのくらい買え、その当時どういう値打として使われていたかが非常にわかりやすく展示してあった。

流通経済に関してはこういう工夫をして並べるとよくわかると思う。ただ銭であるとか、お札であるとかものを並べただけでは、見る人々にさっぱりピンとこない。

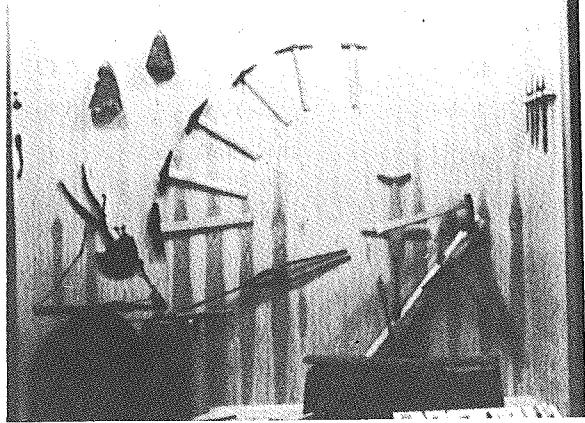
⑩ 私が感心したのは、鉄器時代の展示でハンマーがこういうふうにすっとふりおろされる形で下に金てこがおかれ、やっとこで鍛造している風景、あるいは大工道具を入れる箱だとか、のみとかいろいろな道具類が展示している。これだとこれは金槌であると、こういう道具をつくるための動作まで表わしており、これだけで説明を書かなくてもこのものがどういうふうに使われたものということが非常によくわかると思う。

⑦ これからしばらくは北欧のスウェーデンのストックホルムにある歴史博物館を説明したい。その中味であるが、写真は石器時代の北欧のここに石器がいろいろと置いてある。それからこの写真の方は、石で作った鉛とかが置いてある。

⑧ さっきみたのは展示物がカーブしていて、あれだとガラスの反射が屈折するので、こちら側の見る人も照明をうまくやれば、人間の像がガラスに写って中がみえにくいとうことを防げるわけである。

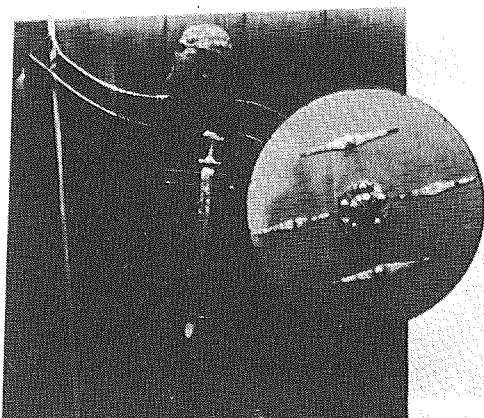
⑨ 写真はそのスウェーデンの博物館でみた古銭の展示室である。ヨーロッパ各地の博物館はその国の、あるいは外国のお金のコレクションを非常に大事にしている。メダルとコインの展示というのはどの博物館にもあるわけだが、物だけ並べた古風なやり方しかやっていないところに比べて、ここの場合には金貨・銀貨・銅貨を一つの時代のものを一つのパネルに並べて、その上にいろいろ殻物や牛などをパターン化したもので、どの銭でどれだけの品物が買えたかを、非常にわかりやすく

日本では棚に置き金槌という難しい字が書いてあるだけの場合が多い。このように物に動きを与えて、物に語らせるという手法が非常に斬新なものと、私は印象づけられた。



⑤ 動きのある展示（スエーデン国立歴史博物館）

板がねで作った抽象的な人間にそれらの武器を持たせた状況で、模造品が取りつけてある。このように展示すると、それは盾の飾り金具だということをいくら細く説明するよりもかえって本当に小学生でも理解でき、こういうことにあまり関心がない人でも、そういう風に並べることによって「あっ、ああいう風に使った。」と、よくわかるのじゃないかと思う。



⑥ バイキングの武人像（スエーデン国立歴史博物館）  
骨は山口県の、土井ヶ浜という所で私共が掘った男性人骨で、胸から腹につきささっているこの部分からサメの歯の矢じりや、石鎌が十数個検出された。その体に当った矢じりのささっている方向から考えて、だいたいこうなるというのをやってみせ、写真のように一族の間で犠牲者だったような人が、墓に葬られている。

⑦ 写真は歴史博物館ではなく、ストックホルムにある中国を主とした東洋の美術館（遠東博物館）で、その美術館で見た情景は、この室の中には全然説明がない。この場合にはこういう品物をよく鑑賞しなさいという形で展示している。

ケースの下にある引出しを2つ程引出してある。これはこの引出しを開くと、そこに細かい説明

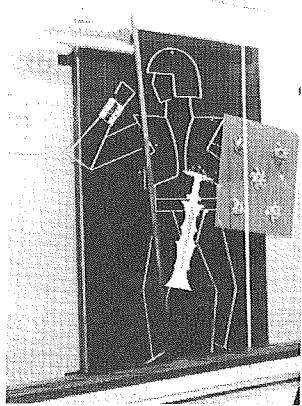
⑧ 写真は私がそれを真似して東京で、15年前「弥生人展」をやった。ここに石斧があり、斧の柄は出土品から似せてつくった。それを木の上にぐさっとうちこんだような状態で表現した。ところが最近できた博物館では、石斧に柄をつけて、これを持つ人間の手を腕の先だけ写実的につくって展示してある。私は手は余分で、動作さえ表わせばいいのじゃないかと思う。

⑨ 写真は同じスウェーデンの博物館で、出土した盾・兜・槍の先・剣の鞘じりの金具等を、この隣のケースに実物が並べている。

⑩ 「弥生人展」の時、私は巴形銅器、細形銅剣、鉄弋、銅の腕輪等を着装して展示した。その時東京の国立博物館の課長から、こんな貴重品を垂直にとりつけると困る。そういうものはケースの上に水平に並べるものだ。そんなことをするのなら借してやらないと言われ、だいぶ閉口した。けれどこうすると、今から2000年前の弥生人がこういうかっこうをしていたんだということがある程度理解できたと、後でたいへん評判になった。

⑪ 写真は同じ弥生人の展覧会の時、この

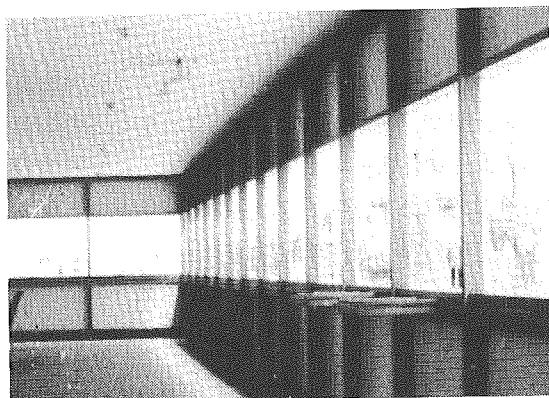
が書いてある。だから単なる鑑賞をする人はそんな引き出しをいちいち開けないでただ物を楽しんでいる。ところがもう少し詳しく調べたい。あるいはこれは何だろうと興味がある人は、この引き出しを出せばそこに詳細な説明書と、参考資料もここに入っていて、詳しくみることができる。詳しく知りたい人のために、徹底した展示をしているので感心した。



⑦ 「弥生人展」の武人（日本）

⑯ 写真は同じ東洋美術の博物館で、この下と天井にずっとレールがあり、これ1枚を引き出してみたら、掛け軸が掛けてある。これ全部がここへ引き手があり、これに作品がずらっと並んでいる。何十枚も並べて、これはストックルーム、倉庫兼鑑賞ということで、これはスウェーデンの前の国王が東洋美術に関心があって、大正14年（1925年）には千葉県で日本の姥山貝塚の発掘にも参加しており、朝鮮半島では慶州では金の冠等が出る古墳の発掘に参加された。この塚の名前をスウェーデン（瑞典）皇太子の発掘した塚ということで瑞宝塚という名前をつけた。

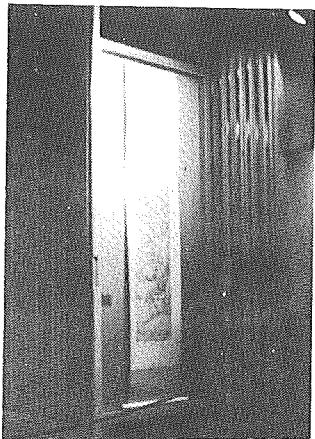
ところで国王が時々鑑賞に来る。こちら側に引き出してみたいものを引出して椅子にすわってゆっくりと鑑賞するというような設備が整っている。ところがこれに似たものは北海道の開拓記念館の地下のやはり一般のルートじゃなくて、下でもう少し詳細に見たいという人のために、これと似たものがつくってある。遠東博物館のレールは非常にスムーズにすっと出て、すっと入れるけれど、開拓記念館のは建具が安もので、ガタピシしなくちゃなかなか引っぽり出せなかったり、このガラスがペコペコでちょっと私もやってみたが、恐くて全部を見る気がしなくなった。やはり家具は北欧だと言われるだけのずいぶん上等なものであった。見ておわかりなように外国人は巻物をうまく巻けない、だらりとケース内に垂らしている。こんなことをしてはかえって絵の保存のためにはよくないが、これは西洋人が不器用なものだということを示している。右側に写っているのは長い引き出しでこれを引き出すと、ここは絵巻物がひらいたまま並べてあり、そのままみられるようになっていて、ちょっと日本人には考えつかないような展示方法をしていた。



⑧ 展示ケースと引出し（遠東博物館 スエーデン）

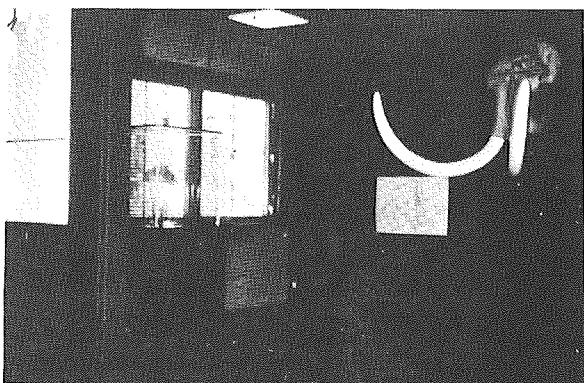
⑰ ここからドイツのものをみていただく写真は西ドイツの首府のボンにあるラインラント州立の一般的な歴史博物館、つまり総合博物館で、ここにマンモスの頭蓋骨が置いてある。このケースに入ってるのが、旧石器時代の世界で一番最初に発見されたネアンデルタール人の頭蓋骨そのもので、この場合はこのケースにピアノ線が入っており、（この写真では写っていないが）、このケースを動かそうと他の人がしたら、電流が通じて、じゃ

んじんと警報器が鳴るようにしている。それは別としてこの頭蓋骨の高さはネアンデルタール人の復元した背の高さを表わし、その向い側にマンモスの高さを表現してある。それはネアンデルタール人がたくさんマンモスをとり、食料にしたり、いろいろなことにしている。その当時の人の背の高さと、マンモスとをわかるように比較していく、工夫をしていると思う。



⑨ 掛軸のスライドケース（遠東博物館）

姦通罪を犯したらしくて、部族の掟で埋めて殺されたのが写真のようにミイラになって残っている。こういう皮まで残っているミイラのようなものは、これからデンマークにかけての泥灰層の中ではいくつか例があり、それが博物館に展示されている。



⑩ ネアンデルタールとマンモス  
(ラインラント州立博物館 西独)

これをおみせしたのは、ヨーロッパの場合は壁に平気で描いているということを示した。日本の場合は展示というとパネルに書き、上品にするのが展示だと思われているが、向うは石造りのりっぱなお城の建物をそのまま使っているせいもあるけれど、壁のペンキを塗り直して、その上に平気でこういう絵を描いて、先程説明したように、展示物を棚の上に水平に乗せるのじゃなく、垂直に平気で展示している。その方が非常にわかりやすい、また、手前にのぞきのケースがあり、壁面をフルに使う展示方法をみていただいた。

⑪ 写真は土器を示して、そのかけらがこういうふうにあると、あるいはこの土器のこの壺のかけらはこういうものだと、ドイツ人はこういった展示方法が好きだが、どうもこれじゃあまりパッ

⑫ 同じようなマンモスがいた時代のテントの状況で、上は完全な復元で、石は遺跡で発掘したものを持ってきて、その上に柱などを復元してこういう生活をしていたんですよという展示をしている。

⑬ 写真はデンマークに近い西ドイツの、一番北側のシュレスビッヒホルスタインという所にある。ミイラの展示で、あばら骨は出ているが、頭のところや腕などは、皮がまだ残っていて、金髪も残っている。目隠しされたこの人は若い女性で、この泥灰層の中から

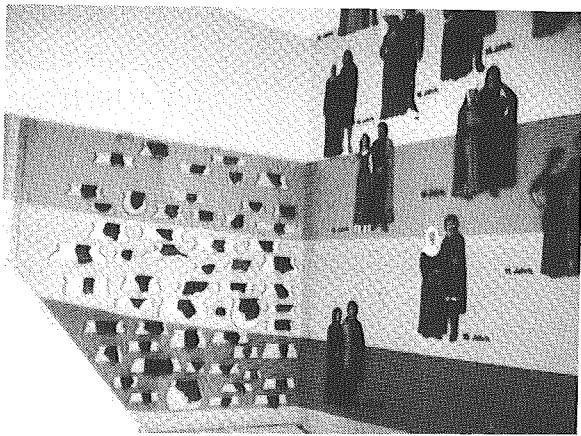
姦通罪を犯したらしくて、部族の掟で埋めて殺されたのが写真のようにミイラになって残っている。

⑭ 写真は同じ博物館ので、こういうのをおみせしたのは何故かというと、この斜面になっているのは、これは元の地山でここに写真のように堀を掘ってみたら、出てくる土器はこういう違いがあるというのを、土器に孔をボルトであけてとりつけている。かけらでは理解できないと考え、形はこういう形ですよと、形を復元してみせている。それだけではなしに、この当時の服装はこういうもの、

あるいはこうだとそれが何年ごろと、これは10世紀、これは9世紀と書いてある。

としない。日本人がこの頃石膏のかたまりの中にちょっとかけらを入れているようなと、どっちがいいのかわからないかもしないが、

それから平気で壁に棚を取り付けて、そこへ物を置いてある。ただし日本の場合は地震国であるから、あんな高い所に乗せておくと、落ちたらどうするかという問題がある。



⑪ 壁にとりつけられた土器と衣装の変遷の展示  
(シュレスヴィッヒホルスタイン博物館 西独)

⑫ 写真はフランクフルトの郊外にあって山の上にゲルマンの蛮人からローマの占領地を保護するために、(日本語では長城と訳している)、長城を築いた迷路がある。このローマのリメス(長城)はライン川からドナウ川までの間をつなぎだ防衛線で、その内側(ローマ領側)数百メートルのところに点々とローマ軍が兵舎をつくって防御した。20世紀の初めにその1つの兵舎(前線基地)を復元した。その建物の中の展示の一部にリメスと2キロメートルおきに見張り台があり、その見張り台から数百メートル内側に城壁を築いた兵舎がある状況の絵が壁に描かれている。



⑬ 遺跡の時代別変遷のジオラマ  
(ハールブルグ市立博物館 西独)

⑭ 同じジオラマの中で写真は紀元前1000年で、今から3000年前、ここが先程よりは、若干埋ってきた。そしてそこから出土してきたものが並んでいる。その時代は上の左の端にあるのはエジプトの有名な女王の首の像であり、この彫刻を現在東ドイツと西ドイツで取り合いでおり、

⑮ 写真は同じドイツで、ルクセンブルクとの国境に近いトリアーという町の博物館であり、そこはライン川支流のモーゼルというワインで有名な川沿で、町の周辺にローマ時代の遺跡がたくさん残っている。そこで掘った一つの邸宅を館内的一部分に復元している。

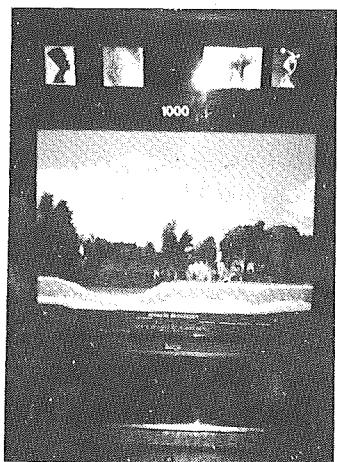
この床にあるモザイクは実物で、この柱もこういう柱頭飾とか、こういう所は実物がところどころにあり、壁面も部分的に実物が入っている。屋敷とそこで使われていた道具も復元してみせている。このように各国いろいろと工夫している。

⑯ 写真はドイツのハンブルクの近くのハールブルグという所に、都市博物館がある。その都市で都市の再開発の時に出た遺跡を、ジオラマ風に20いくつか並べた部屋をこさえているおもしろい。

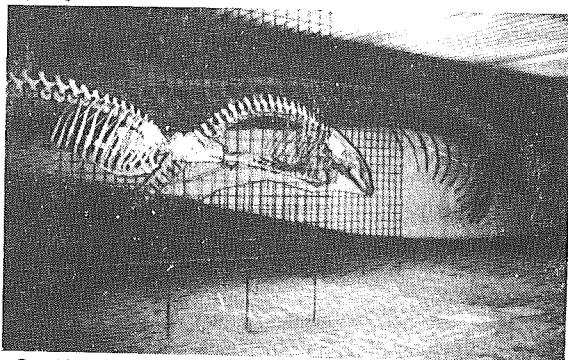
⑰ その中でこういう地形がある。写真は氷山が迫っていて、堆積物がある。それは今から約14万年前だと、左上に説明があって、14万年から12万年半の間のこの辺はこうであったということを記してある。この左のくぼんだ地形をよくみていただきたい。そこから出てきた旧石器を、写真のように並べてある。

エジプトはエジプトでエジプトへ返せという。今、西ベルリンの博物館に並んでいるものである。こちらの右端のミロの円盤投げは今から紀元前1000年前、ギリシャのこういうミロの彫刻を作った時代であるとか、ローマのロームルルスの狼から乳を吸って育ったという伝説の像があり、ここではこうだけれども、諸外国ではこういう時代ですよということを示している。

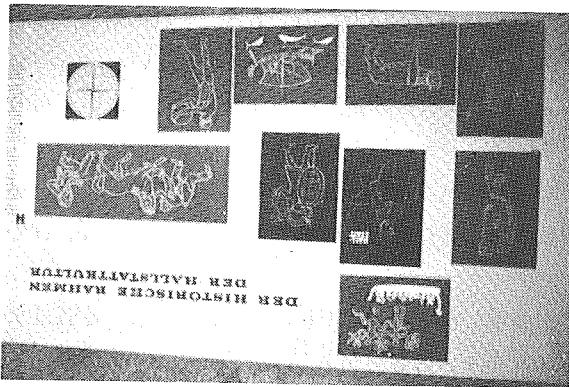
⑬  
（紀元前1000年ルブルグ市立博物館）ハールブルグ



して出土したものがこのように14万年の間に変化したということが、市民にわかるように工夫している。



⑭ 鯨を追うイルカ  
(フランクフルト大学付属自然史博物館 西独)



⑮ ハルシュタット展示室入口の案内板  
(オーストリア国立自然史博物館)

⑰ 写真は紀元後1300年代で、こういう地形で先程より、またこういう風に埋ってきた。この辺には村がこのようにできた。そこで出土したものがこういうもので、というのが並んで、外国の風景、有名な彫刻などが説明されている。

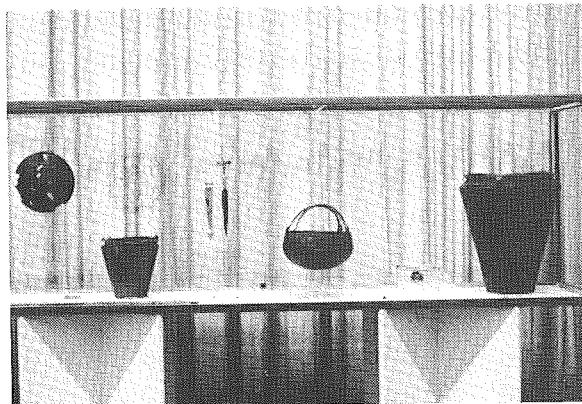
⑱ 写真は1900年で今から80年前、この辺はこうなっていたと今のお年寄がわかるようなもので、1900年頃に使っていた機械の部品みたいなものを下方に並べている。その遺跡は博物館のすぐ側で、都市の再開発を

⑲ 写真はフランクフルトにある自然史博物館で、非常に大きな壁面にクジラの骨が張り付けている。その前を鉄の棒でつくったサッシュがあって、そこへイルカの骨を動きをって展示している。

普通、自然史の博物館というと、どこでもマンモスなどを几帳面な形で展示してあるけれど、これはクジラをイルカが襲っているのが、この展示一つでわかるようにしてある。こういうふうに立体的にするとおもしろい。

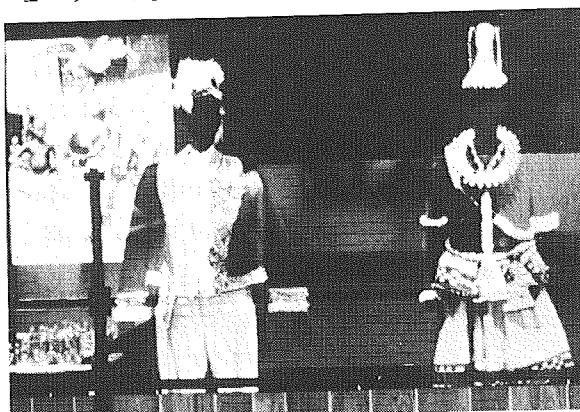
⑳ 写真はオーストリアのウィーンにある青銅器時代ハルシュタット文化の歴史の展示である。これは入口にある。これと同時代の周辺諸国の状況がシンボリックに示されている。例えばローマのロームルルスの狼が描いてあり、ギリシャでは黒絵壺の時代、スキタイではこうだった。北欧の方へ行くとそうだった。それからスペインの方というように、ハルシュタットをとりまく地域的な環境がある程度わかるようにして、それぞれがこうい

う時代ですということを示した。つまりその時代であるかということがよくわかるように示した入口のパネルである。



⑥ ハルシュタット<出土品をつりさげた展示>  
(オーストリア国立自然史博物館)

したのでは、その吊り手があるのがわかりにくいというような場合、平気で吊り下げている。スウェーデンでもこういう展示をやっている。



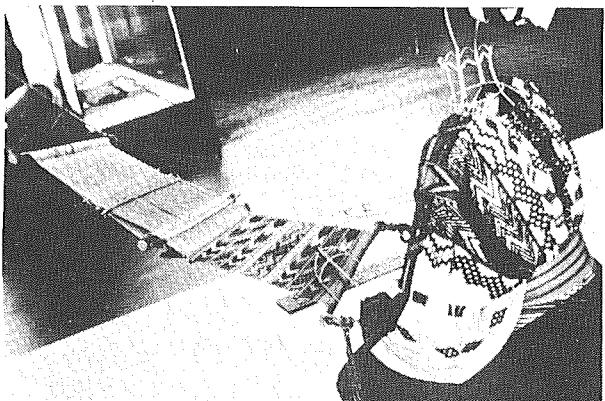
⑦ 礼装の比較（熱帯博物館 オランダ）

ぶらさげている。これはオランダの宮廷で現在でも行なわれているものである。それに対してこれはアフリカなのかインドネシアなのか知らないが、土着の人達の礼装で、頭にはいろいろなものをのっけている。指輪、腕飾り、腰まき風の服装で、これは首長の服装だろうと思う。こういうものをポンと置いたらオランダ人にとっては、こちらはオランダの礼装であり、これは他の国でのこれと同じような時に使う礼装ですよということがピンとわかる。民族展示の一つの例である。それが展覧会の入口に象徴的に置かれていて、この程度のことはこのごろ日本でもいろいろよく行われていると思う。

⑧ これはジャングルの写真が背面にあって、簡単な布でちょっとした服を着ている。これはアラブ系の服装がこちらには永山が写っていて、エスキモーの服装がある。服装はその地域（熱帯、砂漠、北極圏）の服装のちがいがわかるように陳列してある。

⑨ このハルシュタットというのはオーストリアアルプスの山中にある塩の鉱山で、紀元前1000年くらいの時から始まる文化である。この写真には写っていないが、鉱山の中で、鉱山で使っていた木のバケツだとかいろいろなものがそのまま残っていた。鉱山の外側の山腹で数百のお墓が発掘され、そこで出た青銅文化の容器がいろいろ並べてある。この鍋はケースの天井から吊してある。日本の展示では考えられないことである。吊り手があるという鍋は、立ちにくく、パターンと倒

⑩ ここからはちょっと時代が変り、オランダのアムステルダムで見た展示物を若干ご紹介したい。アムステルダムに熱帯博物館、（トローペンミュージアム）があり、この博物館自身はやっぱりオランダの植民地政策を国民に理解させるためにつくったものと思われる。わりに古くさい博物館である。その1階の部分に特別展示をやっていた。その入口に現在のオランダ人の礼装（日本の大礼服）があり、ナポレオンがかぶっていた帽子を持ち、飾りのモールのいっぽいついた服をきて剣を



⑩ 座機（熱帯博物館）

④ 写真は同じ博物館の座機の展示である。これでは実際に機織りはできないだろうが、こういう服装をした人がこういう布をこういう機で織っていたんだという雰囲気はある程度わかると思う。首、手を針金で作ってありこれをマネキンの写実的な人形を置かないでみせているのが、ヨーロッパの一般的なやり方だということを申しあげたかった。なぜかというと、こういう所へ体を具体的に示すようなものを、例えばここに座わっている女人に顔がちゃんと作ってあると、その顔が似ていないということに人間の視線がいってしまう。手なども爪がどうのこうのということになる。

ところがここでみて欲しいのは、こういう機の道具という服装であるということで、人間はその形をある程度想像できるけれども、抽象的に表現している。それが民族資料の展示に関しては大事ではなかろうか。また、こういうふうな服装でこういう姿勢でやるということはやはり示してやらないと困ると思う。

スライドはこれで終ります。とりとめなく外国の私の乏しい経験の中からおもしろそうなものいろいろとみていただいたけれど、また、レジメで書いたように、いかに物に語らせるか、例えば蚊帳ひとつにしても、今や若い人達、子供達は蚊帳で寝た経験もなくなってきたおり、いわゆる民俗資料というのも何に使ったのかということが、全然わからなくなってきた。歴史時代の品物、かつて、これはどう使われたのか全然わからない。それを縄文土器でございます。弥生式土器でございます。沖縄のパナリ焼にしてもそのもの一つをポンと置いたのでは、どんな生活に使われたのかわかりにくい。例えば本部の海洋博記念公園内の郷土村で、復元された家の中で実際に使ってみせたらどうだろうか。

ストックホルムのスカンセン博物館という、スウェーデン各地の民家を集めた博物館ではその家へいくと、その土地の服装をした管理人がその地方的な特色がスウェーデンでも各地で違い、その風俗衣装を着て、ある家では機を織っていたり、ある家ではガラス細工をつくるところをみせている。そこまでいかなくとも、これがどういうふうに使われたかということを、どのようにしてわかるようにみせるかという工夫がいると思う。それから何よりもお願いしたいのは今の日本では博物館というと入れ物を作れば出来あがったみたいに思っておられるが、これは本末転倒もいいところで、どういうコレクションがあって、それを並べるためににはどういう建物が一番良いかというのが本来望ましいことじゃないかと思う。

また学芸員は、私は研究者でございますといい、展示について展示業者にまかせっきりである。今は北海道から沖縄までもそうだろうと思うが、各地でいろいろなものがきていて、私共が行くと、あっこれは○○工芸社の展示だと、これは△△社だというのがわかる、展示業者任せの展示が横行している。展示はやはり手作りいかなきゃいけないと考える。学芸員が自分でトンカチでやる

という意味ではない。つい最近も北海道の手子屈町へ行きまして、教育委員会の人が奇妙奇天烈な建物を建築屋さんのお遊びみたいな建物が出来て、そこでいろいろ近代的な技法を駆使した展示が行なわれていた。ところが評判が悪い。何故かというと教育委員会の担当者は口出しを全然させてもらはず、業者任せであった。

ところが、スウェーデンでもそうであったが、大英博物館でちょうど一部分を展示替をしている担当者と若干時間をもらって話したが、学芸員というのはいろいろな知識を持っていて、ある一つの場所の展示を計画した場合、これとこれをぜひ並べたい。ところがそれは展示を実際に専門としている人達と話してみると、先程から話したように、文字をたくさん書いてもいいし、あるいはあまり一杯あっても自分の部門と他の部門とのつり合いも考えずに、何でも盛りこんだら、結局見た人には、ろくにわからないのではないかというような問題がある。そういうバランス感覚を持っている学芸員もおられると思うのだけれど、なかなか自分の専門で知っていることは全部並べてみたいということがあって、かえって素人にはわかりにくい展示になってしまう。そういうことで大英博物館で話を聞いたら、もめる時は1ヶ月くらいそういうディスプレイの専門家と学芸員とが、展示しようと思うものを前に、ああしたい、こうしようということで、討論し合って決めるのだという。そういう意味ではメキシコ市にある人類学博物館は大学の展示学科と連携して展示をやっているのは大変参考になる。

日本には博物館学講座が、たくさんの大学に設けられているけれど、博物館学というのは何だときいたら、考古学だと、美術史の専門の先生方がろくに展示の問題も知らないままに、かくあるべしというような議論をしておられる。宙に浮いたような話が多い。また、展示のことをいくらかでも知っておられる人達に話をさせれば学問的なことがすっとんてしまうような、中途半端な博物館学が現在の日本で行なわれている。メキシコの場合には学生が一つの展示室を与えられて卒業製作（日本の建築学科などでは卒業製作として設計をするが）、そういうような場所をもらって、いろいろな材料で、こういう風に展示するというのを全部やって卒業していくんだという、非常にうらやましい話を聞いたが、日本もそういう日が来ることを望みたい。

ところが、日本の場合、外国へいろいろなものを展示した時に、外国と条件が違うという問題が一つある。それは湿度で、とくに沖縄の場合は湿度が高い。絵画とかその他の工芸品の場合、にかわをいろいろな形で使う。絵の具を溶いたりするのに使うが、ヨーロッパ系統のにかわは牛の骨から取り、これが湿度40%の時に一番性能が良いものを昔からつくっている。ところが、わが国で使っておる（沖縄県も同じだと思うが）にかわの場合は、湿度が60%でないとうまくいかない。ヨーロッパに持っていき、40%の湿度で展示されると、ひび割れてしまう、というようなことが起ってくる。

奈良の唐招提寺のだいぶ破損した木像で外国のトルソーみたいだと、評判になっている平安時代の初期の仏さんがあり、これを戦後外国へ持って回って、展覧会をやったことがある。持って回っている間にどんどんひび割れてくるので、これは破損したら大変だと、ところが日本へ持ち帰ってみると、今ご覧になっているように、ほとんどひびが元に戻っていて、結局湿度の違いというものがあり、にかわひとつとっても外国と違う工夫が行なわれている。だから博物館の展示は、やはりヨーロッパ、欧米で開発された博物館学というものを鵜呑みにしないで、その土地の状況に合った

ものをそれぞれが工夫なさって、その土地でしかわからないものを、来た人にわかるような展示をしていただく、そういうものを含めて、手作りというふうに考えてみたい。

私も先程からこういう話をしていて心苦しいのは、文化財保護委員会（現在の文化庁）から、ヨーロッパの歴史博物館がどうなっているのか見てこいと言われて、ホイホイと行った。イタリアまで行き、イタリアでおまえ何をしに来たのだと言われて、実はこうこうですと言ったら、イタリア人のある学者に笑われた。そんなものはその土地で自分で考えるもので、何故よそを見に行って何が参考になるかと言われた。イタリア人はとくに文化的なことに独立心が旺盛であり、中国の中華思想と似たような、自分のところが一番良いのだという気持を持っている。日本人は今、何でも盗んで行くと、ヨーロッパ人は考えておる。そういう意味合いを含めて、私等も盗みに行った方に違いないけど、他国を見聞していかに自国の文化財のことについて自分で考えるか、自国の、自県の、つまりその土地でなければ見られない特色あるものを、県民、国民、外国人にどうみせるか、いかに人々に印象を強く与えるか、ということを自分でそれぞれ考えなければならないとしみじみと感じた。

沖縄の場合、沖縄の特色のある文化を、物で、県民はじめ他県民、外国人にいかに見せるかということであろう。しかも一方には、先程ご覧になっていたいものの中でおわかりのように、アメリカのシカゴの、世界でも有名な自然史の博物館で、先住民であるインディアンの文化を展示するパネルに書いてある絵は、下手な漫画家が描いたようなちやちな絵である。ああいうものじゃあ、ある程度の鑑賞力を持った人には少し安っぽく見えるかと思う。だからそういうものも本当に一流（何を一流と考えるのか問題があるが）の、しっかりとした人に協力していただいて、その土地でなければできないものを作るという方が一番大事なことだと常日頃から思っている。

沖縄は美術作品でも非常に勝れたものがたくさんあるということを存じておりますけど、やはりそういうものがどういう環境で作られたのか、かつてそういうものがどういうふうに作られて進歩してきたか、進歩というか今日あるというようなことを、どうやって理解してもらえるか皆さんでこれからその土地その土地でご工夫願いたいものです。くれぐれも歴史博物館で難しい学術用語を一番先頭に立てないで、これは何年位前のだということを、これについてはここにおられる知念君だったら何年とするか、また学者の間でいろいろ批判があるから、あるものについて年代を決めるのに、若干問題があろうかと思いますが、これもしかし大きく間違っていれば、どんどん訂正していくべきいいのでありますし、学問の現在の時点で一番こうだと考えられている公平な先端的なものを並べたても一向にさしつかえないと思います。あまり学芸員の一人よがりの展示をせひやめていただきたいという気がするのです。

歴史展示についてという大きなテーマをいただきながら、どうもざっぱくな話で申し訳ないのですが、まず入れ物をつくったら博物館は終りだ、というのではなくて、計画的にやっていただきたい。例えばヨーロッパでは、あるコレクションがあって、この建物を博物館に使うんだ、と私が行きました時にすでに準備をやり始めていた博物館が、15年を経てやっとオープンしました。それ程慎重にいろいろやったということですが、そういう例もありますが、日本と予算のしくみが違うわけでありますけれども、そういうことよりも、常に改良していっぺんで良いものができなくても、だんだんと改善していける工夫を常にしなければならない。一ぺん展示が終ったらもうこれ

で何年経っても、ほこりをかぶっても放ったらかしてあるというような展示が多いこの世の中で、そういうことに注意をしてやっていただきたい。それから先程から申し上げましたように、物にできるだけ語らせて、そこに来た人に肌で感じさせるような展示をご工夫していただきたいという事をお願いしたいと思います。どうもざっばくな話で失礼致しました。

註　講演をテープに納め、それを起したのであるが、紙幅の都合で文章を縮めたため、中間の写真説明ならびにその後半の一部を、「です」、「ます」調を、「である」、「であった」調に、編集者の要望で直した。なおスライド説明のうち、アメリカの博物館を割愛した。

